（二十二日夕刊）
磐城新聞
休刊　第一第三日曜大祭日
定價　一部二錢　一ヶ月六十錢　郵稅十五錢
廣告料　壹行六十錢　指定廿錢增
發行兼編輯印刷人　蓮沼龍輔
福島縣平町田町十六番地
發行所　磐城新聞社
電話五六四番

嘲笑記（二）

島田忠夫君を駁す

福田將夫

島田君の把握する短歌思想がアララギ派らしい。故に新短歌を頭からあばきけなしてゐる。君が私の歌を口語歌に非ず短歌に非ずと主張してゐるが、君の誤れる總ての所論に對して大人氣ないが、口語歌としての意義をつまびらかに島田君になすりつけてやる。

試みにいくつかの作品を擧げてみよう。

×八時がならモータが唸る俺達の頭が冴へてくる

×薄明をこすぐろい群集が一過して――あとのかそけき。

×わが友がこれを入質せと脫いてくれた黑のマントに頰づりをする

×素足に土を踏むよろこびがこの幼子をどうするかを妻よ見のがすまい

×集ふた兄弟の顔の涙を俺は忘れはしねぞ、

左の歌はある新短歌雜誌より抄出したけである。

この歌就ても直に親ひ知られることは用語と形態の變革であろう。短歌のやうなものでも現代のものとして存在せしむる以上、現代の語によることが自然でもあり當然である。他

自由律運動といふものゝ起つこれは俳句に於ける新傾向と同じ理論によるもので、短歌の格律に餘りに古く、もはや現代人を詩リズムと一致しない。この矛盾を脫するために、短歌の定型をすてゝしまふ外ないのである。

態度としては極めて、自由、明快に歌へる、短歌解体運動云とふよりも寧ろ短歌の放棄で、新しい短詩形をつくることになるのであるから、必ずしも短歌の歴史的展開を認めるにはあたらない。

石川啄木はいつた。「…な・ない、云ふ勝手な拘束はやめて、何に限らず歌ひたいと思つた事は自由に歌へばいゝと」石川啄木がいつたのは既を二十年前であり。彼が歌に悲しい玩具と考へたのは、時代の犠牲として壓迫感に對して逆說的に一種の不平を發したものと見られる。

私の歌に對しても、あの歌が短詩的にしろ、散文的にしろ、口語かさしての存在價値の喪失されてゐないことは的確である。島田君よ、よく思考せられよ。口語かに對する異論なら何時でも快くうける。誤れる藝術論をあばいて、嘲ら笑ふものである。

□

島田君の師、逝つた島木赤彦だから、いゝ具合な嘘も吐けよう。誰も解ぬと思ひ。書き並べる君にたすまゝ顔が見たいものである

島田君の第三項に於ける文中に「先年、岩波書店から、童謠集「柴木集」を上梓し、また今年に第三童謠集とか集を刊行する積りであると、將に賣名的言弄！

亦島田君はいふ「矛」近々平町から雜誌「うぶすな」を續刊するかも知れぬ。うぶすなの既刊の分には京大の新村出博士や早大の吉江喬松教授も執筆して下さつてゐる。云々。

詭辯駄辯を羅列して居るたり、香具師の愚辯以上まことに君の禿頭にカビが生へてゐる。恐ろしい程、自己欺瞞人間と一點の疑ひをさしはさます肯定さる。まさに拾八世紀のすたれものである。

島田君よ何處を探してか人の良心がある。

君如きうのぼれ強きにトカビン常用か人の存在は一層磐陽文壇をます、ます寂寞さに飯す者のたぐいであり非常に情無き存在である

島田君の云ふ如く、磐城文壇も又一動の啓蒙期であり、霖雨時代であつた。

沈倫した一九二九年の空氣を吐き捨てゝ、新しい友よ、翼をひらけ、回顧と批評は、島田君如き親父にまかせ、一九三〇年の新しいレールを自由と新年との風をうけて、探險者の如く進むべきではないか、そして意義ある磐陽文壇の改革と發展とを期そうではないか

・一九三〇、一二〇、稿

附記

島田君の附記に就て

私は的質、君の謂ふ如く郷土は北海道である。露骨なる罵言も詩南車に浴せしは私の弱點であり。弱點であつた。唯、私の第二故郷の文藝運動貧弱を嗤ひ、沈默した詩人への覺醒を希つたのみ了解されたし。

❀明日の吉凶❀

舊曆十二月二十四日　新曆一月二十三日

▲一白　手足纏ひを生じ無駄に時刻を費すこと多し▲二黑　朝の内は手間どるとも追々馴れて捗るべし▲三碧　身を守ること堅實なれば發展の域に入るべし▲四綠　氣を和げ長者を敬すれば其引立てを受く▲五黃　階段を昇るが如く秩序正しく徐々進むべし▲六白　目下の爲に失費あるも後日返り來るべし▲七赤　身体さへ健全なれば他に患ふることなき日▲八白　進むにも退くも氣を落付け注意に注意せよ▲九紫　常業には吉なれど慣れぬ事には凶と知るべし

講談

幕末奇傑　高山彥九郎

(48)

西洋々作
布施長春畫

同志の家（六）

「いや、よくぞ訪ねなすつた」

長い／＼間の沈默のうちに、やつと主計は云ひました。

「むざ／＼よき同志を失つたことは悲しむべきぢやが、しかし、貴殿の仰せらるゝ通り如何にも大事の前の小事ちや。これはどうしてもこのまゝ堪ね忍ばねばならぬことでござる喃」

彥九郎は言葉なく、たゞうなだれてをりました

「して、早速乍ら御位牌は」

「はい、これにもつて參りました。」

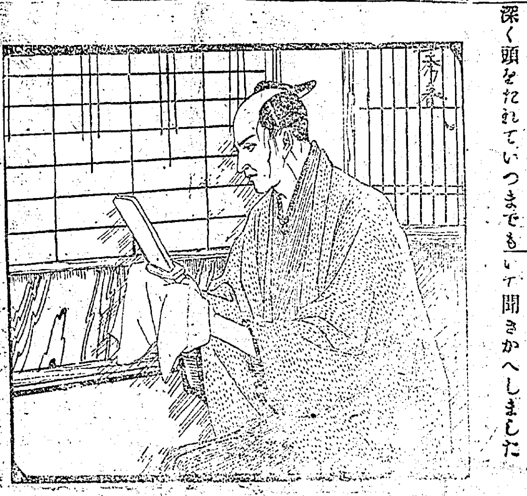
彥九郎はさう云ひ乍ら懷中からとりだしたふくさ包みの白木の位碑

「おゝ」

主計は、それをうけとゝと兩手に捧げてぢいつとみいつてをりましたが

「塚本殿、變つたお姿でお目にかゝる喃」

思きわまつてかういふと深く頭をたれていつまでもいつまでも伏し拜んでをりました。



「貴殿の死は無駄にはせぬ」

そこには志を同じうするものから美しい誓ひが新たにされてゆくのでした

「………」

しばらくは、しめやかな空氣が一座を支配しました主人も客も共に同じい感傷にひたつて居るのでした

聽し、運ばれた茶にのどのをうるほし乍ら、主計は話頭を轉じました

「時に貴殿は、いつ御上洛なされたのかな」

「左樣……九月末でございました」

「ほゝお、九月末と申すと早十日になりまするな」

「はい」

彥九郎はちよつと面映く聲を落して

「早速に訪ね致すべきでございましたが。實はちよつと脇に落ち兼る事がムいましたものですから、それでつい御無禮致しましたのでございます」

「ほゝお、脇に落ちぬことゝ仰せられるか」

聞きとがめて、主計は訊ねかへしました

「はい」

と、仰せられると、如何樣のことでござるな」

「………」

「おさし支へなくばお話し下されい」

「はい、實は」

彥九郎は、そこで蛤御門で、柴田主計と自稱せる武士に出遭つたことをこま／＼と話しました

「ほゝお、それがしの名をかたり居りましたか」

主計は、今更のように驚いて聞きかへしました

「はい、今、考へてみますとお名を騙つてわたくしの心をさぐらうとしたのでございますが、何分あなたさまた名前を存じ上げてゐるだけでお目にかゝつたこともございませぬものですから――つい、柴田と仰せらるゝ方は不愉快な方ぢやと思ひまして、それでつい足遠くなつて居りましたのでございます。何とも申しわけムいませぬ」

「いや、なんとして……」

あはてゝ主計は彥九郎の言葉をさへぎつて

「それより憎いのはその僞主計、おかげでこのしばらくは貴殿にきらはれて居りましたのぢやな。」

は………」

「面目次もございませぬ」

彥九郎は自らの不明を差ぢて面をふせました。彥九郎は明らかに今幸福でした。信じあひみとめあふことを志を同じうするものが互を理解しあふことはこの上なく喜ばしいこと違ひありませんでしたか。

平町南町
上田醫院
電話一二九番

夜間診療
胃腸　內科　十二指腸蟲病　專門　內科部
梅毒　淋病　婦人病　皮膚病　專門　外科部
松村胃腸性病科醫院
（平南町電話一〇七番）

貸切自動車の御用命は
昭和タクシーへ
高級車で乘心地の好い
昭和タクシー
平驛前
電話は三四三番
サシミ

平町紺屋町
吉田眼科醫院

貸地廣告
平町郡役所より稅務署附近の新開地に五百餘坪の貸地があります、然かも完全な土盛でありますから流失其の他の憂ひ絶對になく商店、諸工場並に高級の住宅地として最もの適地を極く安値にお貸しいたします
御希望の方は電話なり就けば社員が伺ひして親しく御相談に應じます
小名濱商事株式會社
平出張所
電話六〇三番　五四一番

營業種目
內地材
材木各種、羽柄材各種
建築諸材請負
礦山用坑木其他諸材請負
外材部
米松、米杉、大角製材調達
請負　其他
㊀佐藤材木店
常磐線平町新川町
電話三三五番

平町田町
高久病院
電話五一三番
醫學士　高久忠
新潟醫專學士　赤羽清
藥劑士　佐竹菊雄
內科小兒科、外科花柳病科、耳鼻咽喉科、レントゲン科

宮內省御用達
ヒゲタ醤油
銚子醤油株式會社

特約店
平町田町
廣瀨支店
電話五四番

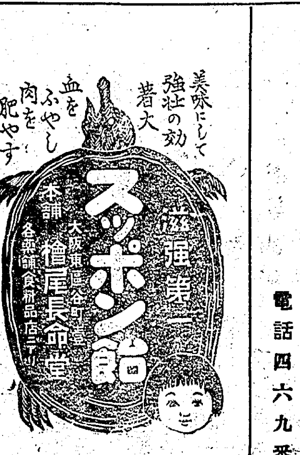
外科一般（入院隨意）
內臟外科專門
花柳病科
平町六丁目（橋際）
木村外科醫院
電話三〇九

特賣!!
たひら正宗　福島縣清酒品評會一等賞受領
花春　同　優等賞受領
醤油釀造元
鹽屋　山崎合名會社
電話一〇番

內科、小兒科
花柳病科
入院應需
藤沼醫院
平町紺屋町
電話平局五〇七番

外科　產科　婦人科
醫學博士　藤本順
院長　木村寅次郎
平町新川町
木村病院
電話一六四番

動力使用
最新獨逸式製材機取付
製板製材並びに諸建築用材一式請負
迅速―叮寧―安價
㊅增尾木工場
平町仲町
增尾甚市郎
電話四六九番


美味にして強壯の効著大
血をふやし肉を肥やす
滋養第一
スッポン飴
增尾長命堂

スッポン飴　一圓　二圓
スッポン酒　一圓　二圓
スッポンヘモクロビン錠　三圓
平町五丁目角
山野邊藥局

市原醫院
（入院隨時）
內科、小兒科　市原卯太郎
外科一般、婦人科　市原陸郎
外科、梅毒、淋疾
皮膚病　市原三三男
平町田町本通
電話一一四番

內科診療
消化器病科　呼吸器病科
小兒內科　一般內科
入院應需（自炊ノ便アリ）
平町鼠坂
渡邊內科醫院
電話一六一番

淸釀世界　造元
㊀清水屋
石城小名濱町
銘酒
各炭鑛御用達
小野晋平
電話六番

豫定の如くきのふ解散
石城の政界俄然活氣づく
鎬を削る政民兩派
多士齊々の石城政友會

豫期されてゐた第五十七議會も愈々昨廿一日午後四時四十分を期して解散の運命に會した同日夕刻右の飛電が石城郡政友、民政の各部會宛に到着するや各派は遽かに色めき立ち今廿二日早朝から平町内は何處へ行つても選擧の話で持ち切りの狀態で殊に各派部會の幹部連は愈々時到れりと來る二月二十日の總選擧の當日を目指して何れも切齒扼腕死物狂ひで對策につとめて居る、先づ郡下の政友派部會では今廿二日夕刻前代議士木村清治氏が歸平し今明日中に幹部會を開き最後の總會に諮つて公認候補の決定を見る筈であるが、同派では飽く迄現內閣の批政糾彈氣を發揮し粉骨碎身是が非でも勝利の榮冠を獲得すべく先づ前代議士の木村清治氏を推薦し若し同氏が各般の行懸り上隱退した場合は第二候補に植電社長金成通氏を第三候補者に鈴木辰三郎氏を推すべき目算で猛進する事に大體の決定を見てゐるもの丶如くである尚之れに對して民政黨部會では飽く迄も比佐昌平氏を公認すべく來る二十四、五日頃總會を開き正式決定を見る筈であるから石城の政界は益々活氣を呈するに至る模樣である

平の上水道問題で
町當局が猛進
反對派を排除して
正面から攻擊の態度

如何に沈着とはいへ三度に一度は拂ひ除ける必要ありと漸く反對派の策動に對抗狀態を示しつゝある平町水道擴張派はむしろ攻勢に出でるを有利として全町民の約四分の三から促進陳情の調印を取りこれを主務大臣に提出すると共に一般が擴張に理解のある樣理由を發明した事は既報の如くで反對派が又調印をまとめ批判演說會を開く等でいよ〳〵表面の正面衝突を演じつゝあり知事が仲裁の勞を取るべく伏見町長及反對派野崎滿藏氏を呼んで調停に努めたが更に効果なく益々成行を憂慮されてゐる町當局ではこの際許可の促進さるゝや遲延さるゝやは一に町民の態度にあるので先に配布した擴張現由書の姉妹書類として昨廿一日町會にたいて滿場異議なく可決されて以來主務省の手に移り現在交附さるゝ計りとなつてゐるこの經過の概要を記した印刷物五千枚を全町に配布し町民の贊成に念をたすと共に向背に處すべき道しるべとする處あつた

入學難に次へで
就職難生活難榮達難

三月を目の前にして世の青雲を志す青年諸君、三級の波を超して登龍門を破せんとする學徒の諸士、今や染色失神の有樣である實に悲慘とも慘酷とも人の子の親たるもの誰か熱湯を浴ぶるの感なき者があると謂ふべきである、それが現實の活問題であつて、又容易に除かれ得ざる人生必須の至難事である。

◇

何時も謂ふて居る、教育を以て人間を造ることは不可能である、馬鹿を利好にすることは出來ぬ恐物を賢者とする分には參らぬ、惡人を善人にすることは望まれぬものである恐物を大恐にし惡人を大惡人にするまでのことである、天才は教育の結果ではない聖人君子英雄豪傑は敎へ柄ではないのである、然し人間には不可能と知りつゝも慾がある何とか僥倖でも宜ろしい間容れ當りても宜ろしい闇夜の晩に躓に引つ掛かる財布の大なることを希ふと言ふ妙な根性がある、即ち愚痴である此愚痴が愛情と混からかつて來ては堪まるものではない、財產もある時間もある何とか馬鹿息子でも責ては他人一倍の愛資をざ、情實にも緣故でも禮有るもの手繰つて一丁前の人間らしく育くゝ見度いも決して無理からぬことではある

◇

試驗地獄情實地獄叔は緣故地獄贈物地獄とある下あるが、之我國が明治維新以後僅々六七十年で以て世界の一等國の班に烈したのである、鎖國封建の舊夢を脫醒して一大奮發を以て手當り次第に西洋の各種の文明を採用せねば間にあはなかつたのである、故に西洋學問のある指導者案內人が多分に必要であつたので語を換て言ふば西洋式の學問さい持つて居る者なれば小しは馬鹿でも恐悶でも飛ぶ樣に賣れたのであつた、

即ち其當時の社會狀態が斯くの如く其小學問者を需要したのであつた、是が爲めに卒業免狀とか洋行の履歷とかを持つた者は其實資の如何などは問題では無かつた、ドンドン賣れ出して次郎も太郎も貧乏士族の子供も安敎員の三男も十年と經たぬ間に高等官何等從何位勳何等と鰻登りに登つて行つたのであつた、それを見た農商工の有產階級の親達である、矢も楯もあつたものではない、學校だ學問だ敎育だと押すな押すなの大繁昌を來すのも決して無理からぬことではある

◇

而して是の大勢が今日の我國の富强を齎したのであつて決して惡かつたのではない、此勢で持つて來たから日清日露世界大戰と押してきたのである名實共に世界の一等國とも成りうせたのである、然し物には究極なるものがある何時迄でも同一事情の下に止つて居るものではない、明治五年以來小學校令が布かれて國民の義務敎育が行はれた、作事小屋にも畔路の裝場にも新聞や雜誌が置かれてゐる時代になつた、從つて是れが案內人も指導者の其資格が相當上らねば間に合ねが當然である

その上に斯の形勢を鵜呑みにして狙つた父兄であり學生であり學校で敎師であつたから權も八も學校さい出れば指導者世話人になる考へとなつて仕舞つたのである。

闘鷄賭博犯
吉田廣三郎
刑務所に收監

既報の如く平町才槌小路吉田廣三郎方裏に於て昨年來から殆んど連日に亘り數十名が一團となり闘鷄賭博を開いてゐるのを平署員が探知し十九日午前十時半頃中島刑事部長指揮の下に變裝警官十數名が現場に急行多數の金を積んで軍鷄を闘はせてゐる賭徒平鎌田町小林初太郎(三二)外三十餘名を一人殘らず逮捕珠數つなぎにして本署に引致し嚴重取調後科料者十六名を除き吉田廣三郎以下十數名をたゞちに平檢事局に護送し同局の取調の結果吉田廣三郎並に神谷村中野善吾の兩名は有罪となり平刑務所に收監され他は罰金に決した

自殺未遂青年
彦根署の
たづね者

既報、石城郡湯本町山形屋旅館において小刀で心臟を突き刺自殺を圖つた滋賀縣愛知郡稻枝村生れ山本庄太郎(三九)はその後加療中であるが經過頗る良好で平署では所轄彦根警察署に照會した處山本は三年前から彦根町小林製糸會社の計理課員として勤務中京都祇園の藝妓に迷ひ前後數十回に亘り四千五百圓の使ひ込みを爲しその穴埋に窮してゐた折から去る十三日會社は整理に着手したので發覺を恐れ逃走したもので彦根署で行方搜査中の者と判明した

上小川村の大火
十棟全燒半燒一棟
原因爐灰の不始末

石城郡上小川村大字上小川內倉草野源太方から昨二十一日午後二時四十分發火し同四時鎭火したが燒失家屋四棟同非住家六棟半燒一棟で損害原因等は目下取調中であるが前記源太方園爐火の不始末に起因したものと見られてゐる

植田水電總會
配當は年六分

石城郡植田町水力電氣會社昭和四年度下半期貸借對照表並に利益金處分承認に關する定時株主總會は二十五日午前九時半より開く配當は時節柄前期より約二分を減じて六分となす筈である

平在鄉軍人が
軍人思想の
普及に

石城在鄉軍人聯合分會平町青年團並に平在鄉軍人分會聯合主催で來る二月一日より三日間平町聚樂館に於て軍人思想普及の爲め連鎖劇大橋幸太郎氏一行を招き開演すると

讀者と記者
寒中の水
酒井生

寒水は藥だとは昔からよく言はれてゐる所でありますが、寒中の水が他の季節と違つて特に効能があるといふことはなく、水は水でその成分に變りはありません、但し井戶水を使用してゐた當時には秋から冬にかけよく水が澄んで來て綺麗になり、水中に含有されてゐる種々な病源菌が惡疫の媒介をすることも春夏に比して著るしく少いので、斯う云ふ口傳が世に行はるゝに到つたものであらうと思ひます、然し水を適當に飲用することは二四時中我々の健康を保持する上に非常に重大な役目をもつて居ります、總て我々が攝取する榮養物は體內で溶解して全身を廻つてこそ初めて其目的を達するのであります、いくら榮養分を攝つても之が溶解して全身に廻らなければ役に立ちません、所が水がこの媒體をなして先づ榮養物を溶して必要な各器官に之を輸送し、更に不要なものは排泄に力めるもので即ち身體健康保持の上に於いて根本の問題である新陳代謝を促進する第一線に立つてゐる甚だ大切な役目を持つて居ります、從つて水を充分に攝取することは新陳代謝を促し、種々な病氣、殊に秘結性の人には有効です、斯かる人は從來より餘計に水を攝取して新陳代謝を圓滑にすれば直ぐ治ります、水と言つても仔細に見れば質に種々あるものですが、不純分子のない學理的に最も純粹な水は水素二分子、酸素一分子の蒸溜水であります、一寸考へると不純分子のない水が身體にもいゝやうに考へられますが、日常使用するには之は決して衞生的に好結果を來すものではありません、却て人に依ると下痢を起すことがあります、水道水には必ず多少なりとも鹽類を含有してゐます、水は無色透明で無味とされてゐますか、矢張味はあるもので咽喉が乾いた時などに飲む水は正に甘露の味であり爽快な味がするものです

植田物產總會

植田町植田物產會社では二十三日午前十時より株主總會を開き定款變更の件を附議する筈である

海陸無電で
漁況報告
水產試驗場で
鰹漁から實施

縣水產試驗場では五年度の新事業として海陸連絡無線電話の裝置をなす筈で既に準備に着手した、目的は所屬試驗場石城丸と本所との間に漁況報告を受けそれを各出漁船漁業組合等に連絡通信し、併せて天候急變にそなへるといふのであるが年度がはり早々機械の取付をなし五月の鰹漁期に活用せしむる方針である

磐東銀行總會
今期配當五分

植田町磐東銀行の定期株主總會は二十五日午前九時より同行に開催昭和四年度後期決算並に監督役一名滿期に依る選任をなすが今期配當は從前通り五分である

鼬鼠を
捕獲して
平署に檢擧

水戶市常盤本山町生れ當時平町北白銀三六居住勞働者杉本立造(五三)は去る十二月二日以來無屆けで鼬鼠わな十八、九個を使用し各々數匹の鼬鼠を捕獲し平町六丁目佐藤榮吉に一匹に付き一圓五十錢から三圓五十錢の價で賣却したる事平署に發覺された

昨日書類送檢された
平の面白い闘鷄の話

平町才槌小路二六吉田廣三郎(三二)方に於て昨年末から殆と連日に亘りその筋の眼をかすめて開帳してゐた闘鷄大賭博團は遂に平署の爲め一網に逮捕され取調べの結果檢擧されたもの三十五名のうち十六名は賭博現行犯として廿一日一件書類を平檢事局に送致された、右十六名は賭博犯として体刑又は罰金刑に處されるものと思はれるが右の外當時現場にゐたもの全部は警察犯處罰令により科料その他相當の處罰を受ける筈である何れにしても本縣では稀に見る犯罪なので興味があり人氣を呼んで居るがこの賭博は丁半賭博の如く一倍ゞ興味があり初めれば決してやめられぬとのことであるその方法は先つ直經五尺の輪型の土表をつくり周圍を莚にて圍みその中に二羽の軍鷄を入れて闘はせたものであるが甲の鷄に五十圓賭ければ乙の鷄に五十圓かけるものがなければ勝負が出來ず勝てばかけ金が約倍になつて戻るわけである而して闘鷄の宿は一人について約二十五錢の入場料を取つた外かけ金全額の二割をとる所謂これが寺錢である一勝負は一時間から二時間位かゝるが軍鷄は戰闘計畫が非常に敏活で驚くべき觀察力を有し尚戰闘力に餘裕あつても現任の敵にかなはぬと思へば戰はずしてク、、と鳴けば最後で敗けとなるが此の敗けた鷄を直に次の鷄と闘はせると相手が弱いと見れば疲を拾てて猛然立つて闘ふ故に闘鷄をやれはやめられず今回の連中もその勝負高總額は數千圓に達し寺錢も一日四、五十圓になつたらうとの話だ、こんなわけで闘鷄は茨城縣のやうに絕對に禁止して居る縣も多いが本縣では未だ闘鷄に關する取締は出來て居ないと

四倉町の
納稅表彰

四倉町役場の調査による昭和四年の納稅表彰者人員は納稅組合關係者三百七十一名個人百六十七名で合計五百三十八名であつて近く之が表彰式を擧行する

赤井收入役逝 石城郡赤井村收入役藁谷常松(六六)氏は二十日午前二時ごろ腦溢血で死亡した尚氏は最近同村の滯納整理について非常に心配してゐた

上遠野にも
火事
原因取調中

石城郡上遠野村大字根岸商荻秀清方から廿一日午前十時頃發火し居宅物置各一棟を全燒し植田署で損害原因取調中

二三月中に
許可なき時は
夏期斷水か
平町が焦慮

工費三十七萬圓を要する平町の水道擴張は目下許可促進と反對派とに分れ互に陳情運動を行つてゐるが現在の水道取水量は每秒一個一分七厘で一日十萬一千八十八立方尺に過ぎぬところ昨年八月中の最大使用量は一日十二萬六千七百二十立方尺に達し約二割の不足を告げ淨水塲附近の滲透水を揚水唧筒で沈澱池に揚水辛うじて補給した程であるが給水戶數は人口の增口に伴ひ年々二百戶を增加してゐるしかも增水工事は大瀧江筋より沈澱池までの鐵管敷設だけでも約三、四ヶ月を要するので二、三月中に許可なき時は夏期斷水の外ないと町當局が焦慮してゐるのも無理はないといはれる

減刑の嘆願
老娘師に懲役七年求刑

石城郡四つ倉町を始め同郡下の各所を荒し廻つた東北一の折紙附の破藏師の石川郡母畑村生れ當時住所不定無職前科九犯大串音松(七二)にかゝる窃盜被告事件の控訴公判は二十一日午前十時から福島地方裁判所で小野村裁判長石田金子兩陪席判事係長嶺檢事立會ひの下に開會殆ど生涯を獄舍で暮らしたる老賊も婆娑に未練が殘つてか殊勝らしくも減刑を嘆願した長峰檢事は破藏犯の重いことを論じて懲役七年を求刑して閉廷次回言渡しは二十八日

舊謝恩本年度最終週間
平館
大河內傳　郎　河部五郎
照る日曇る日大會
初篇ヨリ終篇迄三十六卷
全上映
普通席　金十錢

サロンのバーには
何時も生ビールがあります
毎日變つた佛蘭西料理の御献立をして御座います
ドーゾ御試食を……
田町松月堂隣り
美味で評判の　きもちよい　サロン
電話　三五二番
男、女給仕人數名募集

毛糸編物講習
生活改善は衣服から
消費節約も衣服から
發育盛りの小供には
毛糸編物が第一
夜間輕便文化器の
編物を無料講習致して
居ます、どうぞ
御遠慮なく御出で下さい
平町田町　藤田女學校隣
ハシモトヤ糸店

新築落成
耳、鼻、咽喉科
氣管食道科（專門）
平町南町（舊診療所向電一七〇番）
大和田醫院
大和田郡司
自炊の便あり

X光線科
外科專門
入院隨意（自炊の便あり）
平南町
上田外科醫院
電話一二九